

瀬戸内海巡航情緒

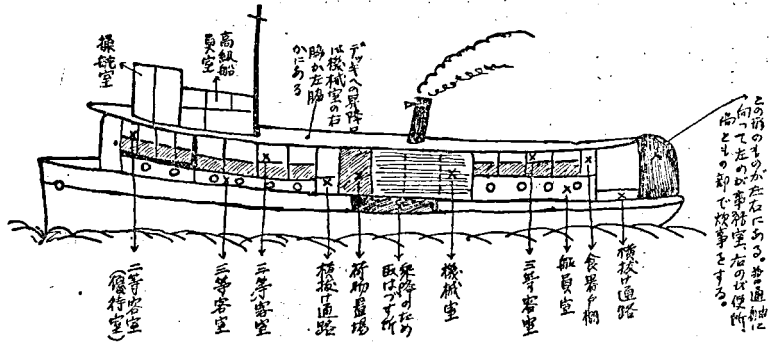
藤原與一

題して瀬戸内海巡航情緒と云ふ。これは先年恩師の東條先生を大三島にお迎へ申した際、恰もよし當日は快晴無風は勿論尾道から大三島の肥海乗までつた發動機船が新造の軽快船で、同種のものでは最優秀船の部類に屬するものであつたため、先生のお氣に召すこと甚だ大なるものがあり、發動機船はまさに瀬戸内海の海上タクシ―だね、とのおほめのお話があつた所からつけた名。尤もこの發動機船の方言は、島嶼部に於てはジュンコセン又はジュンコーセンの勢力が、ハツドーセン又はハツドーキセンのそれよりも遙に大なのであり、序に童詞としてはトントコセン、ポツポセン、ポツポコセン、パツパセンなどが行はれてゐる。

島方相互の連絡にこれの活躍する事は云はずもがなで

瀬戸内海巡航情緒 (藤原)

あるが、地方と島方との交通も九分通りはこの巡航船即ち發動機船の舞臺なのである。凡そ地方から出た便船は島方を縫ひ、廻りして他の地方へたどりつくのが定石であり、この外に島を一つ廻るのを仕事にするもの、二つの島をかけて廻るもの、島の間を千鳥足で往復のみするものがあるわけであるが、これらに巡航船の名が與へられたのは寔に天命である。そしてその航路の配船が運轉にも經濟的にも輕便な發動機船であつたことも又自然である。かくてジュンコセン即ちハツドーセンと云ふことになる。こゝらの消息がすでに島の生活を滲ませずにはおかない。して見れば巡航の名辭そのものが既に島の情緒だ。況んや巡航の行動に於ては尙更のことで、湖面の如き穏やかな波上あり、島の自然的景觀あり、いや、こ



ここでは言語あり、傳説あり、俗信あり、民語あり等々だ。

その巡航船には凡そ三階級が認められる。中が一番普通で大きさも中庸、約五十尺位の所が普通であらう。私が中と稱するものの一見して明らかな船體構造上の特徴は、操舵室（及びそれに後續する高級船員室）が二階の前端にあるもので、都合によつては船客もこのデッキの上で

休むことが出来る（間に合はせにゴザ類を敷いて坐つてゐるのがよく見受けられる）。下手ながら圖示して見ると大體上の様なものにある。これが下の階級のものになると上圖の二等客室の所が操舵室即船長室になつて然も僅にこの部分だけは他の部分よりも少々脊高く突き出すことによつて全體の恰好の均勢をはかつてゐる。要するにツクリがすつと簡易になつてゐるのであつて船形全體小く、専ら島方内及び島方相互間の交通にあてられてゐるのが通常である。囊の中と云つたものは巡航船の本然のものであつて先づ大抵の航路はこの船である。それが重要地點の往復のためとか距離が大分長いとか又は濼受の浪荒い地方を通らねばならぬとか或は他との競争上優秀船を必要とする場合、そんな時には上の部類のものが用ひられる。これは中のものよりも形は大きく構造はむしろ蒸汽船をつくりである。これならデッキも本格に使用する様にできてをり二等客室も廣く、速力も第一等である。たゞそのエンジンの音のみは飽くまでポツポコセンの域を脱しない。

これなら長途の旅に利用しても大した疲労はないわけ
で従つて事實それにふさはしい客を多く見出すのである
が、中の分になると長路は少々無理である。激動がある
と思へば思ふほどそのひどさ削減が増す様な心地がする
のが常であるから。所が下の分になるとこれは島の部落
の者がその土地の産物を市場へ運び物貨をもちかへり、
且つ郷土人を安く乗せることを目標にして氣の長い方針
(中以上の間に介在してやつてゆくためにはかくせざる
を得ぬのである)の下にやつてゐるのが多い勢もあるの
か割に荷物が多く七貨三客と云つたものも些くない。田
夫の姿よろしく乗れるのがこの船であつて見れば我々に
とつては一番親しい船である。

嶋々遊びの面白味は右の巡航船を利用すると共に一度
島の一端に上つたらその島をぐるりと廻つて見ることに
ある。勿論大きい島は船でも廻れるが、陸路を廻るの
が地理學者でない採集家の我々にはより有難いわけであ
る。これには自轉車を利用することが一番よささうで、

私の何度かの経験も概して失敗を思はせない。自轉車を
擔いだ島の巡航船旅行——これが時間的にも一層經濟で
然も要點々々では遠慮なく滞留ができ、隨所に何にでも
ぶつつかる自由があり、且つ疲労の度も矢張り少い。と言
つても小さい島になると道路が全く難澁で全然乗れぬ所
か、汗だくで押し上げ、降りには又汗だくでブレーキを
かけ乍らぼつぽと下りねばならぬ所も數々あるけれども
實はさう云ふ時ほど島の旅としての味が深かつたのが自
分の記憶である。

瀬戸内海中央部の所謂藝豫叢峰一帯を廻るためにどう
云ふ巡路をたどればよいか又たどるべきかと云ふことは
問題であるが、一般の方々が地方からこれらに入られる
場合を考へると、先づ尾道と今治とが最も便利な出發點
であるからその際すぐに大三島の西、宮浦の地に入つて
こられるがよからうと思はれるのである。何故最近の島
へ渡らないですぐに……と云ふ疑問もある次第であるが、
萬事につけ廣島愛媛の接衝點として考へられるのが私に

とつては大三島なのである。(但し言語的に見て最も特徴顯明な接衝點は伯方島ではあるが、生活事情一般的には——その常識的には——南方系のものが基礎をなしてをると見得べく、又地方からすぐこゝへ入つては次の行動を有意義に起すことがむづかしい)。民俗採集の族にはどうしてもこの島を振出しにすべきだらう。そして先づこの島の西側の宮浦なる國幣大社大山祇神社に頼きその國寶を拜觀して甲冑類(甲冑國寶の約八割)の偉大さに驚嘆すべきである。

この大三島の北部西部と見て早速西へ——と島を傳ふがよい。すると西にゆけばゆくほど安藝らしい色彩の濃くなつてゆくのが氣付かれるであらう。丁度下蒲刈島までゆく。そして大三島の方へ東向して黙想して見ると大三島以來安藝の色合が朝顔の花の如く開けてきてそれだけ影響の大きいことを知り得るだらう。更に西の島の倉橋、能美、江田の諸島になると最早や朝顔の花の外で、安藝の旗本とも思はれる。たゞ注意すべきことは島は藩治から云つてどこの領分だつたとしても(勿論その影響

は、縣の區劃にも流用された所から、曲りなしに今に至るまで一番大なるものがあるが)地方との相關的對比に於て一味の變哲さがあるのである。地方から海に潜つて島に這ひ上つたとしたらその人は息苦しさのため顔面に充血させてゐるか乃至は蒼白になつてゐるであらうが、何事でも島へ移動した時には丁度その程度の變改があつたのである。随つて島と島との相互の間に於ても離れてゐる時は勿論相並んでゐる時でも面白い差を生じてゐることが間々あるのである。且つ中にはもと伊豫の國の島であつたのが安藝のものになつたと口碑や社の棟札によつて傳へられる。大崎下島の如きがあり、或は佛教の宗派の關係で古來遠方の島と仲好くしてゐるのがあり、藩の流罪人の刑處に指定された島などもあつて、いづれ親しく近くに並んだ島々にも思ひ遣りかねる節々が多々あるのである。(但し反面又物事の移動の理法が同じい所から、移動をうけた島相互間に島らしい特質のつながりがあり、島嶼部なる概念を形成さすのも面白いことである。)こんなことを心配して見れば、「朝顔の花の如き影響」な

どもどうしてももう一べん丁寧に調べてから云はなければならぬのであつて、きまりきつてゐるとするのが一番恐ろしい——それこそ恐ろしいにきまりきつてゐるのである。

そこで大三島から西への遍路の道順を一例して見よう(こゝらで一才略圖を出しておく)。大三島の宮浦を振出したらこの島と對向してゐる最初の廣島縣の島、大崎上島へ渡るべきだ。取附きが先づ木之江。それから南側を東へ廻つて鯨。共に潮待の名港で御手洗とともに早くからチヨロをもつて聞えてゐることは周知の如くであるが(但し鯨の方は遠方まで聞えてはゐないらしい)木之江と鯨とは長兄と末弟の程度で全く相似の地である。民俗的に景勝を求めるならばむしろ島の北側から西へかけて廻つた方が本島の個性を窺ふに足るべく、生業の方面に、傳統、習俗、言語の方面に、本島以西の島々との連關の消息を窺ふに足るものが多々見出されるのである。音韻現象でも、備後の拗音化現象が安藝の南部に波

瀬戸内海巡航情緒 (藤原)



ら西は自轉車をやるに不便らしくそこで再び島を横断して山越しに木之江へ出なくてはならぬ。この間には自動

及してゐると考へられるその影響がこちらへも波及してゐて現に生きてゐるのだから全く驚喜させられる。(このことは後の報告に委しく述べたい)木之江から鯨崎白水へ廻るまでは立派な道路であるが、それか

車の便がありはするものゝ自轉車は全く難しい。上りは石ころが多くてつき上げるにさへ困るほど下りは急峻彎曲がひどいから餘程勇敢でないとい自轉車には乗りかねる。木之江から本島西南岸の沖浦まではこれ又前以上の

險阻な細山道、共に四十分ほどの山越だが今度の方が大分骨折りだ。一先づ海岸に下りるとそれから海岸道路を走らせて沖浦に入ることが出来る。此處は漁村であつて又此の島の一特徴を見るに足る。これだけ廻れば、先づ港としての木之江、鮎に於ける潮待所及び海上交通の一中心地としての情緒、それが醸し出す生活と言葉がわかり、次に農村の北岸を眺め最後に漁村の西岸を訪ふ。

これで三要所を押へたわけ。所要日数はどうしても二日。この島でとりわけ面白いのは權傳馬の行事なのであるが、これも後の機をまつて島々とりまとめて報告し度

5。
大三島以西は島が横隊の一行で行儀よく並んでゐるから船は東西に航行するのみで樂に港に着けられ、廻り道が少しもない。その上船の数が多く、ちつともをれ

ぬので損をし乍ら夜分遅くまで運轉してゐるのが多い状態なので至つて便利であり、豫定表はなくとも時間を空費する様なことは更でない。

ではその都合のよい船の朝便で大崎下嶋へ渡らう。島としての固有の特徴を失つて他の特徴を擔ふ様になつた點に於て木之江と選ぶ所の少いむしろ先輩の御手洗は略して(そんなものに目をくらまされないうで)久比にすぐ渡るのが上島との比較上最もよろしい。そして思つたほど上島とつながりのないには少々意外と思はせられる。一つは御手洗と久比との間の大長村が仲々先へ進んだ農村で全國でも模範的な柑橘園の土地でありその影響が四周に及んでゐる所からとも思はれるのである(これから西の島では盛に柑橘が作られ、今では東の島へもほとんど眞似られて行つてゐる状態である)。

久比は極く純情な農村で私も最も印象深く感じてゐる。この地からはどこへ動かうにも自轉車のおせる道すらない。全くの島山で南側へは餘程の不便である。この

一ヶ部落に一日近くの時間をかけなくてはなるまい。

それから相も變らず便利な便船で西へ赴き豊島の東側小ノ浦に上陸する。この島にも三ツほどの部落があるが自轉車では右へも左へもゆけぬ所、加ふるにこの狭い島で仲々俗氣が多く驚かざるを得ない。だが調べたいことでは格別變つたこともないから豊島はこの中心地小ノ浦一ヶ所でよからう。久比とこととで一日行程（勿論日程は一ヶ所で相當仕事をし乍らの話である）であるが午後になつてこゝへくればその夜はいやでもこゝの宿にかねばならない。

私は別案をたて、久比からすぐに上蒲刈島へ行き引きかへして御手洗まで上つてくる時に途中で下りたわけであるが、これも主としてこゝばを調べた私は大して失敗したものとも思はれず、むしろ人にもおすゝめしたいと思ふ。と云ふのは政治區劃の上から見ても豊島は大崎下島の西部と共に豊濱村であり、且つこの豊島までは豊田郡であるから久比で相當突込んだ意見がきかれ、ばすぐ

に上蒲刈（安藝郡）へ廻つても間違を起す様なことはないから。かくの如くに豊島は久比と大體ちがはぬのだと思つて西へ下り三之瀬までゆきつめて今度東上する時にたしかめる様な心算で豊島に寄れば御手洗までの直航の無聊を慰するに足り至極好都合である。

さて蒲上刈島。大浦からはじめて田戸、向浦と東、中西の三ヶ要所を探訪すれば大抵踏み外しはない。そしてこの間は大體自轉車が使へる。下蒲刈島では白浦の對岸の三之瀬一ヶ所で先づよからう。大體漁村で、向浦と三之瀬（サンノセ、サンセ）の間には五分ほどで渡れる、テンマに帆をまいたワタシブネがあつて、兩岸から一艘づゝ出ては同時に對岸へ到着する様にしてゐる。

久比あたりから西はすべて熱心な眞宗國で安藝門徒の名と自信と相高く、蒲刈島でも上下とも何だか生活態度に特徴がある様にさへ見えて仲々面白い。そして又音韻的にもアクセントが非常に面白く、豊島までとは全くちがつた型で蒲刈ある。アクセントとして報告する機会を

是非もちたし。

以上の蒲刈島四ヶ所で大體一日を暮すと晩方所謂上の級の發動機船で東上することができる。大崎下嶋の都御手洗へつのが夜の九時頃か。こゝは又齊灘（イサガハ）をうけた潮待の風待の港町。新聞の趣味記事では木之江などと同様に紹介されてゐるがどうして／＼木之江よりも遙かに高雅な古典的な色調をたゞよはせてゐるのがこの御手洗である。その名も神功皇后三韓征伐の御御手を洗はれたが故にとの口碑もあるほど。とにもかくにも昔からの港町で、徳川の參觀交代の時世には瀬戸内海に舟運を假つて東航する諸候の船頭場として随分繁昌したものださうである。當時の御本陣の残存してゐるものがあり今は寺に造り替へられてゐるとか。

さればあのチヨロ又はチヨロブネとても因縁古きものであり、木之江、鯉のそれに比して時代的な風味を感じしめるのも思ひなしか。丁度船の着いた九時頃通船に移つてすぐ耳にひびくのは碇泊した船のそれ／＼から響く

絃歌の種々相である。

碇泊燈の弱い光は長く波上に落ちてゆらめき、かすかな空の光に黒いかけを海に落してゐる山かけ、又船のかけ、はては長々とした柱のゆがんだかけ、それらのいと物淡い中にチヨロブネのひびく櫓聲がしてまことに幽玄境とでも言へるほどである。而もその中からあそこからもこゝからも船人の歌ふらしいドラ聲の磯節などが三味線の音に綾どられ乍ら湧いてくるのである。

通船から上つたばかりの海岸の回漕店の二階に宿を得た私は今更の様に御手洗の港を俯瞰して見た。矢張りうす黒い港だつた。船の胴の間の光は外へも洩れない。その薄暗い中を縫ふて時々女の甲高い聲がきこえる。時たま方々の岸で××屋のチヨロコ——と叫ぶ聲がするかと思ふとつゞいて××のオートサン或はニーサンと云つた聲がつゞいてくる。時にはチヨロの漕手が泊り船に掛合ふ話が手にとる様にきこえてくる。動と静とがあまりにも顯著に變轉してゆく夜の動きすべてが私にとつては悉く不可思議であつた。旅の整理をし乍ら旅館の人からき

いたのだが、船がこゝに入港する毎にあれば内のお得意だと云ふた工合に繩張争ひがやかましく、不景氣の災風になやまされるほど皆一生懸命で醜い競争をつゞける――とは仲々辛いことである。

十二時近くになる頃は漸く絃歌のおとひゞきはなりをひそめ、又そろ／＼チヨロブネの艫の音がする。その頃になると今まで、全く氣注かなかつた海岸の諸所方々から悠長なき／＼も知らぬ三絃の調子がひゞいてくる。四圍の音がばつたり止んだのは零時半頃だつたらう。

私が翌朝六時の船にのる頃、霧の中につゞまれた港の船々は皆夢の中だつたがその帆柱は格別長く感ぜられた。仕事をやめた様な氣分を見せていつまでも横つてゐる船を見て、私は文字通り幻滅を感じたことである。

だが聞けば女達は朝、船を去る前に裁縫、洗濯などをするのみか、船が今一日も滞在するものなら洗ひものをもつて上つて、のりばりにしてまでやるとのことであつた。かくてこそその船はヒトジョー毎にいつも、いかりを深く落さねばならないのであらうか。

御手洗を去つたら向ひ合ひの伊豫の島岡村島にわたる。小御手洗の規模を備へた農村で、何かと一切大三島流である。流石は舊松山領の上島七島に屬するだけである。

正午に近い便船でこゝから宗方に辿りつく。宗方から宮浦（尤も宮浦へ出るまでには一つ難所があつて自轉車をおすのにも困る程であるが）を経て井ノ口までゆけばその日は終りである。これで朝顔の花の筒元まで戻つてきたわけである。

今度は大三島で、も一つの朝顔の花の形の筒元を探して東の島々にその花の開け出でる所をたどる。これからは西へ行つた時とはちがつて島の配置が全く不規則だから發動機船の便が西と比較して大變悪い。それを緩和すると云ふわけでもなからうが至る所にワタシがあり、又オシオロシがある。随つてスローモーションながら島から島への移行には大して事缺かないのである。宿屋のことも、西の方では格別述べなかつたが東西共に八十錢程

の御宿なら大抵の部落にあるから安心である。

扱て今一つのたどりかけた朝顔の花の形は方言的に見て備後方言の西南漸及と考へられるものであつて、尾道地あたりで大輪をさかせた朝顔が根元に至るに随つて段々細り、筒元は先づ大三島の東側に突當ると見られるのである。その一輪の花に覆はれる島々は向島、因島、佐木島、高根島、生口島、弓削島、佐島、生名島、岩城島ではなからうか。今は井ノ口から出發するのだから先づ生口島へ渡る。

最初に着くのが瀬戸田町（この間は便船が多い）。ここで用を果して序にワタシを渡つて高根島に行つてくる。生口島に歸つたら島の北側のそれこそ廣い道を東走する。名荷が東北端にある。そこまで。名荷からは一山越して南岸に下り、更に西に走つて南生口村までゆくと無事に用事がすんでこれで一日。これだけの地點を見れば大體この島狀は盡くせる筈である。一體この島（特に南側）は勿論因島あたりは海賊に因む史蹟多く、後にの

べる大島、伯方島はその最も縁故深き地である。その他大三島にしても、岩城、生名、弓削、佐島にしても史的な口碑の多いことは、かへつて西方諸島以上であり、随つてその道の大家の調査のため來島せられたことも一再ではなかつたらしい。

南生口で一泊したら翌日は因島へ渡り海岸を眞直に北上して重井につく。立派な道ができてゐて樂な行程だ。そこで用事がすんだら渡船をたのんで佐木島にわたる。これが又山の多い島で三部落間を自轉車で飛ばすことができぬ。私は二度とも重井の對岸の須ノ上用をすませて失敬してゐるが、佐木島の北端へ出れば本佐木部落があり、これは三原の影響など相當うけてゐるのではないかと想はれる節々がある。

佐木から重井に戻つたら中ノ庄までよい道を走らす。次で西浦まで一坂越えて（道はよいが上りは急なため自轉車にはのれぬ）今度は因島西岸を南下する。

田熊は青物果實類の市で有名な所、土生町も青物市も

あるが大坂鐵工所の因島ツクがあつて嘗ては人口三萬にも餘り島としては全國で比類を見ぬほどの殷盛ぶりを呈した所。それがうんと下火になつて又少しも直しかけてゐるのが現況であるが、こんな所であるから我々の旅には大した興をそゝると云ふほどでもなく、まあ土生の漁家の一群が特異である位だ。そこで土生から一つ低い峠を越して三ノ庄に出る。この峠越しは上りも殆ど全部自轉車にのれるほどの立派な道。三ノ庄で用事がすんだらそこで一泊。沖を見渡せば因島南部と生名弓削兩島との間の細長い海面に二千三千四千噸と云つた巨船が郵船のマーク淋しく六七艘もつながれてゐるのを目を奪はれるであらう。

翌日はワタシを渡つて弓削の上弓削まで。今までも度々あつたが凡そどの渡場でもすべて警察の許可に基くものであるが故に賃錢などは公定になつてゐる。

上弓削から下弓削に南下して用事がすんだら弓削島の颯島の佐島へ渡る。佐島から生名島へは青丸と云ふ下の

級の青塗船でわけなくゆける（島の東側へつく）。生名がすめば岩城島へ出るのだが、爲には生名の西側まで自轉車の車輪の通りかねるほどの小徑を越さなくてはならない。そして岩城のフナコシと云ふ所へわたして貰ふ。岩城へついたら本村へ出るのに立派な道路が通じてゐるから先づ大事な。これで一日の行程がすむ。この日の行程の所々には土俗學の學術的資料が散在すると稱せられ、それと云ふものを二三私も見たことがあるがよくは分らない。

以上で、大體第二番目にかゝけた朝顔の花の形に覆はれる部分を廻つたわけであるが、これらは要するに方言的に言へば、備後方言の西南漸及の範圍を見せたものであつて、その漸及の力は朝顔の花の根本の細るが如くに弱くなりつゝも上にのべた諸島を傳つて大三島まで達してゐると見られるのである。

これが見てしまへたら岩城から大三島の瀬戸へ歸らなければならぬ。この間は船便があるから苦にならぬ。

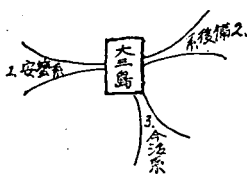
そして瀬戸を調べて見るとこの大三島の東南部（瀬戸帯）へ今一つの影響の波及してゐることに驚かされる。そこで残された大島伯方島の探訪に出かける。

瀬戸から大島へは好便がいくらかもある。先づ泊に下りて調べ、ことばなどは今治の生き寫しなることに驚かされ乍ら又船上の人となり西に廻つて椋名あたりに上陸する。やはり今治の子だ。それから陸路を宮窪へ出る。ここで宿をとることにしてこの島の色々のことを総合的に調査して見ると結局大島は今治地方の相似形に異ひないとの断定がつく。もし今治言葉を知らないで大島にきてゐるとすれば今治言葉はこんなものだと思へばよい。

次に宮窪から伯方島にわたり木之浦に出て見る。それから立派な道路を伯方島西北部の伊方にでる。これで行程は大體済み終つた。（これで更に大三島を精査すると面白い段取りである。）そしてこの地からいづれへ引上げるにしても船の便はよいから安心である。

この伯方島が言語的に廣島愛媛兩方言の接衝點であることは先にも觸れたのであるが、生活事情の一般的に見て常識的に本島が南方の影響を基礎にしてゐるとは云ふてもよいらしく、島の人々もさう云ふ風に考へてゐる。

そしてその伯方島の生活の底流になつてゐる南方系が多少は大三島の南部に顔をのぞけてゐると思はれるのであつてこれが先に言つた、「今一つの影響の波及」であつた。これも序に例の喩へで第三の朝顔の花の形式影響とすると花輪は今治地方で開いて花の筒元の所が瀬戸あたりにのぞいてゐると云ふことになる。こゝですべてを便宜的



に圖示すると上の如くである。然も1と2とは、ほど同じ赤色の朝顔でこれは北方であり、3は紫色の朝顔で南方産であつた。そして大三島は白の朝顔に外ならず、種々斑な色に染まりつゝあるのが現状ではあるまいか。

（註）島を傳ふ以外に地方からの直接の影響ももとよりある。

遍路行の道順を一例しようとした企圖が、大三島を中心とする三系統主義の旅程を主張するに至つてこんな長くなつてしまつた。然し私が自轉車持參の旅を讀へたのはこゝにかゝげた以上に數多くの土地を踏むことにしたいからである。いづれはいくら委しくやつても切りのないことであり、これこれが代表だからこの島はすんだ——と云ふことにはならない。今はたゞほんの暫く満足し得る程度を示し得たつもりにすぎない。もとより淺薄の迂愚生、妄説と獨斷を擅にしたことをいたく恥づる次第である。

どうも巡航情緒が巡航論の様になつてしまつたが、最後に少々巡航船の天真爛漫な所を御紹介申上げたい。

1 先づ通船——この巡航がいくら小さくとも島のどの港へ行つた所で棧橋横付けと云ふ様な仕掛けがあるでなし、皆通船が用ひられてゐるわけであるが、これは方言で云ふテンマが大抵このカヨイセンに宛てられる。この通船は港毎に異色があり、本船の影も見えぬ内か

ら船を沖合に漕出してまぢうけるのがある。こんな時にはよく船を岸から突放したあとからお客が出たり、荷が出たりするものだ。これを知つて機嫌よく船を返すのはよいとしてアヒタニヒテツカーイ（明日にして下され）などと一聲嗚つたまゝ平氣で漕出すのがある。

これらは時間勵行主義の者で、寔に本船ホシセンに忠實な方であるが、島でできた發動機船又は島の人の（殊にその村の人の）所有にかゝる發動船などの場合は馴染である所から、こちらでちやんと融通を利かして好きな放題をやる。例へば發動船は沖へかかつてまつてゐるのに通船は一向に出てくる氣はいはなく、よく見ると、えーやつと海岸の道路を車に依などつんでもつてきてゐるのを通船は平氣でまつてゐると云ふ様な始末である。乗客こそよい面の皮で大抵は自烈つたくなるのである。

或は又寄港地が相接してゐる場合など、巡航船が折角元氣に汽笛をあげて入港すると、海邊で回漕店のオ

ヤチが葵葉帽子をふりふり、アツチーサーキーイテコーイ（あちらの港へ先につけてこい）と云ふ様なことを嗚鳴る（大方は約束のあつた客がまだ見えぬのである）。するとこちらは已むを得ずすぐ近くの次の寄港地へ先にゆく。今の所に降りる心算のお婆さんなどはいづれびつくりものである。こんな時に限つてたどつて行つた次の港の者だつてきまつて、早く來すぎたよ！てな顔をしてゐる。

2 所で巡航船自體の方でも——伸々ゆつたりした場合がある。時あつて發動機船の航路の途中に船をのり出してまるで扇の的の官女よろしく帽子や手拭をふりく合圖をするのがある。すると此方でもオーライの意味でポツと一聲あけて適當な所で停船する。するとその船から客がのりこみ、又は市場宛の荷物が託される。あたかも乗合自動車が一定の停留所以外に内證でとまる様なものであつて内證事も甚だしい。

然し時には非常に急がしいものもあるわけであつて最も速力の鈍い船に現代の超速度乗物名が渾名附けら

れることもある。

3 けれども何もかもスピード時代のお蔭か今ではどの發動機船も皆一様に時間の短縮を計り、乗客の下船地を乗客のある毎に調べておき、又回漕店の方では乗客がない時は旗で標識する様にして、乗降共にならない時は汽笛一聲ですぐゆきすぎる様にしてある。丁度電車で乗降者がない場合にそのまゝ停留所を過す様なものであらうか、

4 十年ほど前頃は船がお互に客を引かうとして賃金の値下競争をやり、時には景品までつけたものであるが、今はそんな馬鹿はしない。尤も船が澤山できて似寄つた航路が幾重にもあるのでそれらの船がお互に速力の競争をやり回漕店同志でも互に牽制して客を吸引しようとする手管はまだ方々に多い。

5 中の階級の船には三片ほどの菓子を盛つた皿をつけてお茶を出し、代金十錢也をとつてサービスをするものが多い。そしてこれは中の級の船に限つたことではないが女の乗員が一人づゝはゐる船が多い。實は家族連

れで乗組んだ場合もあるけれども中にはサービスのため船員の炊事のために特にのせてゐるものも些くないのである。かうなると朝食早々にのつた場合でも下船地が近い時などは逸早く船中の例の菓子を出されるわけである。お年寄とか田舎の親爺さんとかで頑として湯呑に手をふれぬのもあるが、菓子をもつてくる前に先づ、番茶を汲んだ澤山の湯呑ののつてゐる盆から一個の湯呑をとつて貰ふのに骨を折る給仕さんも仲々辛いことである。湯呑をとつたら菓子は因果必然なものだからお客さんの方でも仲々考へて慎重なる行動をとるとは世知辛いものだ。私はこの湯呑サービスは大變面白があつて如何にも發動機船にふさはしいことゝむしろ愛好してゐる次第だが。

但し自轉車に對しては全く亂雑なサービスで、中には正々堂々と賃金を申受けるのがあるけれど、時には晴天白日でないのが見受けられるのは屢々感じを悪くするのである。(ワタシブネは必ず半人前程を自轉車にかけてゐる)

6 かうして多くの發動機船が同一水路あたりに幾つも動いてゐるのが目下の不景氣ぶりのため薩張り芳しからず、それとて休船するよりはと云ふた風で夜に入るまで一生懸命猛烈に運轉してゐるものが多い。馬鹿げた競争はやらんにしても尙何とかの協定のほしい様なものはいくつもあらう。

7 も一つ忘れてはならないのは海上に於ける僚船相互の挨拶である。いづれかど汽笛をポツと吹いて御機嫌よろうをやると必ず相手が之に應じ、船員お互も又よく手拭や腕などを輪にふつてヨイヨイと交してゐる。大きな汽船の場合は勿論挨拶の交換をやるがこれら小さきものの中にあつても一通りのことをやつてよい所を見せてゆく所に拘すべき面白があるのである。

8 かうして巡航して行つてどこへ上陸したにせよ島では誰を捉へた所で遠慮なしに物をきくことができる。それが男子であらうと女子であらうと相當の年恰好の人なら可成り役立つ程度に教へてくれるのは嬉しいことである。

9 以上の如くのみびりと面白く巡航船にのれて、おまけにその便船の中では種々の民俗に接し、地上に足を印すれば悉くが寶の島、又船の人になればボンボコセン

は島の磯傳も島と島との峽海等を無限萬態の景色を満喫せしめつゝ走り廻る。

これが島の旅の全豹であり、巡航の情緒であつた。